

資料にあたっている。各ミッションの年報、議事録はイエール大学、ハーバード大学に所蔵のマイクロフィルム版・電子版を使用。日米の新聞・雑誌資料、医学雑誌、宣教師の出身校の紀要なども参照している。各派の新聞・雑誌記事は『近代日本キリスト教新聞集成』で、教会や人物の履歴、キリスト教用語には『日本キリスト教歴史大事典』を、聖書は『聖書 聖書協会共同訳』を活用している。現在の「看護師」は「看護婦」を使用するとしている。

研究でわかったこととして、来日アメリカ医療宣教師の1) ミッション内での役割の変化、2) 医学教育への関与、3) 日本人医師との差別化、4) 医療とキリスト教の総合史にむけて、の4点があげられている。戦後のアメリカ医学導入の伏線として、明治初期から太平洋戦争まで、彼らの医療が身近にあったことの意義、そして現在も継続していることの意義が述べられている。

看護史とキリスト教では、マルコによる福音書の6つの慈善のなかに看護が入っていることから関係がある。長門谷先生が研究されていた、リード、ツルー、リチャーズの活動は、日本の最初期の看護教育を行った3校にかかわる。しかし現在

もリードの教育的背景はわかっていない。ここがわかれば日本の最初期の看護教育がどのような影響を受けてスタートしたかがわかる。

藤本氏は学際的な領域にチャレンジし、包括的な研究を行った。本書はこれから医療宣教師研究を行う研究者への便宜、背景の理解、手引となる価値を持つ。今後はさらに保健分野との関係、公衆衛生、保健所、保健師の分野にも注目してほしい。また宣教師は、日本の幼児保育、学校教育、音楽史（讃美歌）にも影響を与えており、周辺領域の研究にも継続した目配りが必要である。

著者の藤本氏は若手の科学史研究者で、本書で日本医史学会より2022年矢数医史学賞を受賞している。経費には研究助成金を活用している。今後は、さらにカトリック側の医療宣教、アメリカ以外の宣教師の活動、日本への宣教の特徴（中国宣教との違いなど）も課題となろう。

(平尾真智子)

[法政大学出版局、〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎内、TEL. 03(5214)5540、2021年8月、A5判、448頁、5,800円+税]

## W. ミヒェル 編

### 『蘭語訳撰』（逆引き版）

外国語の学習には辞書が欠かせない。それは、読む、書く、話す、いずれの場合でも同様である。江戸時代には、後の2つの用途は長崎通詞か、ごく限られた蘭学者以外には考えられなかったろう。蘭人との接触を必然とし、またある程度の蘭語修得済みを前提としているからである。世に言われる蘭僻大名には種々のタイプがあるが、中津藩主奥平昌高は『蘭語訳撰』と『バスタールド辞典』という2種の辞典を編纂した。『蘭語訳撰』は文化7年（1810）に刊行された日蘭辞典であり、そこに出る蘭語の単語をアルファベット順に、すなわち蘭日辞典として組み替えたものが本書である。「逆引き」と称する所以である。

『蘭語訳撰』に出る総数7072の語句をABC順に並び替え、それぞれのオランダ語に元来の見出し語とその読み（ルビ）を配当し、しかも巻数や後述の部門名、それに書き入れられた蘭語を付すという作業に、細心の注意、多大の時間と労力を払われた編者ミヒェル氏に敬意と感謝の念を表したい。

本書（全324頁）は解題76頁、逆引き辞典本体が246頁、索引2頁の構成である。ミヒェル氏による解題は、いつも通り手堅く新情報に富む。11項目にわたる解題（各項長短あり）は、辞書編纂の時代的背景に始まり、『蘭語訳撰』編纂の立役者奥平昌高、神谷源内、馬場佐十郎3名の相互関連と出版への事情を記し、最後にヨーロッパへの伝

播と西洋人による利用へと説き及ぶ。個人的には、メドハースト(W. H. Medhurst, 1796–1857)の『英和・和英語彙』編纂に利用されたこと、ライデン大学ホフマン(J. J. Hoffmann, 1895–75)所持本の現存などの話題もさることながら、殊に、ある『蘭語訳撰』の辿った軌跡が興味深かった。すなわち、駐日オランダ理事官(かつての商館長に相当)ドンケル・クルティウス(J. H. Donker Curtius, 1813–79)は1855年、自らの日本語文法の手稿とともに『蘭語訳撰』をバタフィアに送ったという。この時送られた同辞書こそ、「逆引き版」が底本とした中津市歴史博物館蔵の同書であり、しかも、そこに書き込まれた見出し語(漢字)の読みのローマ字表記はクルティウスの手になるとミヒェル氏は推定している。

『蘭語訳撰』は松村明監修・鈴木博解題で影印版(臨川書店, 1968)が出されたことがある。それによると、総数7072の語句は基本的にイロハ順に並べられるが、さらに天文、地理から飲食、人事など19部門に細分される。したがって、同じ音で始まっても、どの部門に属するかで順番が異なってくる。医学という部門はなく、もっとも近い部門は「身体」であろうから、例をとると、「熱病」(Koorts)には「シヤウカン」というルビ(このルビが上記ではローマ字表記された)がふられている。あるいは「頭」(Hoofd)は「カウベ」とある。当時の「通俗ノ言辞」(同書、凡例)が用いられているから、どの部門に配されているかの推定や読み方にも現在とは異なるものが多数あり、利用は熟練を要する。

奥平昌高は「凡例」で『蘭語訳撰』編纂の意図を「初学先ツ彼邦語ヲ熟習諳記スル」ためと記す。馬場佐十郎も「オランダ語を容易に覚える法を案出するよう」(蘭語序文)昌高から命じられていた。まったくの初心者には日蘭でも蘭日でも大差ないかも知れないが、英和や蘭和辞典などに慣れた今日のわれわれには、なかなか扱い難い。『蘭語訳撰』は左綴じ、横書きで、左端にオランダ語、右端に邦語が書かれているから、蘭日辞典と見た目は変わらない。しかし左側のオランダ語は当然ABC順には並んでいないし、一行は右から左へと

読まねばならず、当初は戸惑うこと甚だしい。「逆引き」にすると、同じ形容詞を冠した表現や、合成語はそれを構成する最初の語の順番で並ぶから、覚えやすくなる。

日蘭辞典は、そこに出る語彙をやみくもに覚えるのでなければ、念頭に浮かんだ日本語に対応する蘭語を探すのに用いられる。この点で、昌高が「凡例」で「遺忘」という言葉を2度使っているのが目を惹く。つまり忘れた言葉を探すのに便利だというのである。これは昌高自身の経験に基づく発言だろうから、彼のオランダ語能力が気になる。

昌高は十代末に晩年の前野良沢からオランダ語の手ほどきを受けていた(鳥井裕美子『前野良沢』, 大分県教育委員会, 2013: 253–255頁)。彼の語学力を示す資料は少ないが、シーボルトが『江戸参府紀行』(平凡社・東洋文庫, 111–112, 186頁)で、下関の宿主のために昌高が書いた蘭文を商館長コック・ブロムホフが褒めたこと、またシーボルトに会ったとき挨拶やこちらに来るようオランダ語で述べたという証言をしている。さらに商館長ステュルレルとも会っている(以上「解題」)。どのような会話が直接なされたかは明言されていないが、これらより、「遺忘」というだけのオランダ語を習得していたのだろう。

『蘭語訳撰』の発行部数は限定的だったと推量される。5冊本と2冊本の2種類あるらしいが、転写本を入れても、現存部数は20部に及ばないという。「解題」では、本書を利用したフランス人やドイツ人学者にも言及されている。『蘭語訳撰』はむしろ西洋人の日本語理解・研究に活用されたと言えよう。

最後に余談であるが、『蘭語訳撰』を捲っていた時、物理学用語をと思いついて、地球や磁石の極(Pool)を探してみた。Poorとあって、よく言われるrとlの日本人特有の取り違えが見られた。ご愛敬である。無論「逆引き版」ではカッコで正しい綴りが添えられていることも付け加えておこう。

(吉田 忠)

[中津市歴史博物館, 〒871-0057 大分県中津市1290番地(三ノ丁), TEL. 0979(23)8615, 2022年3月, 324頁]